

パーティカル社

日本の作品で米出版界に参入

先発4点、上々の反応

米国のマス市場に向けて、日本の現代小説やノンフィクションを刊行しようというパーティカル社・酒井弘樹社長(41歳)の「写真」は、米国に渡って5年間の準備を経て、今春4タイトルで米出版界に参入した。秋にはさらに6点を刊行し、来年には20点を準備。日本でも6月8日に一部書店での販売を開始、多様な販路開拓にも取り組んでいく。

酒井 仕組みを整えば勝負できる

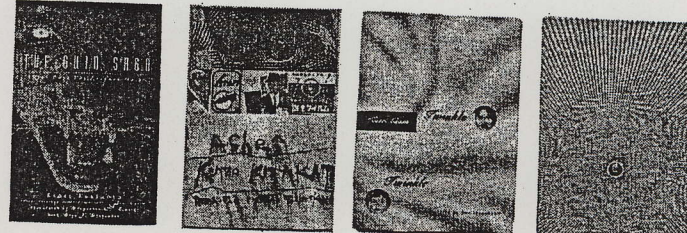
4月15日の鈴木光司「リ」手応えは「クオリティ」を皮切りに、5月1日への反応は極めて良く、大は9月刊行の山田太二「夏」(Strangers)、10月刊行の「ク」の引き合いや、ハリウッドから映画化の話もきている(酒井社長)という。月1日に北方謙三「樺の哀しみ」(Ashes)、栗「リング」は発売前に重版本「グイン・サーガ」を決めるなど、新人として刊行した(下の表紙写真、右から)。



酒井社長は大学卒業後、日本経済新聞社に入社。出版局で書籍編集を10年、日経BPOで「日経ビジネス」編集に2年携わった後、98年に退社。翌年ニューヨークでパーティカル社を設立

した。日経時代は立石泰則「覇者の誤算」、堀田刀「おるな」司」などを手掛けた。日本では翻訳本がこれだけ出ているのに、なんで日本の作品が海外に出ないのかと疑問だった。が、受け入れられるものがないのではなくて、仕組みがないため」と結論付け、当初は作品を選び、翻訳まで「コーティネット」して米出版界に売り込むモデルを考えた。

しかし、01年に日英バイリンガルで作品の吟味から英語の編集までこなせる日系シンヤ人のヤニ・メンザス氏と出会い、自社で出版することを決意。メンザス氏に続き、ハートリーで勝負する考え。



「例えば、米国の書店は本を買取で仕入れているのは仕組み自体がなかったで、カバーデザインが魅力的でなければならぬ」ということがある。本の選択、英語のクオリティ、流通など仕組みを整えなければならぬ。米国では出版社と書店の直取引が多いため、在庫管理から書店受注、配送、代金回収を代行するディストリビューターが存在する。同社もこうした会社の一つ「ナショナル・ブック・ネットワーク」(NBN)に流通を委託した。作家とは直接交渉でこうした仕組みを整えれば、受け入れられる作品自体は多いと見ている。選択の基準は「第一は日本社会の構造を知らなくても分かる書き方をしていること。2つ目は構成力があるかどうか。米国では展開に引き込むよう、しっかり構成されていないと受け入れられない」という。日本の作家とは直接交渉がほとんど。通常、日本の出版契約には翻訳と英語版刊行の権利が含まれているケースが多いからだ。打合の年間40点刊行している作家の大部分は申し出を歓迎しているという。ただ、出版社を無視する「例えば、米国の書店は本を買取で仕入れているのは仕組み自体がなかったで、カバーデザインが魅力的でなければならぬ」ということがある。本の選択、英語のクオリティ、流通など仕組みを整えなければならぬ。米国では出版社と書店の直取引が多いため、在庫管理から書店受注、配送、代金回収を代行するディストリビューターが存在する。同社もこうした会社の一つ「ナショナル・ブック・ネットワーク」(NBN)に流通を委託した。作家とは直接交渉でこうした仕組みを整えれば、受け入れられる作品自体は多いと見ている。選択の基準は「第一は日本社会の構造を知らなくても分かる書き方をしていること。2つ目は構成力があるかどうか。米国では展開に引き込むよう、しっかり構成されていないと受け入れられない」という。日本の作家とは直接交渉がほとんど。通常、日本の出版契約には翻訳と英語版刊行の権利が含まれているケースが多いからだ。打合の年間40点刊行している作家の大部分は申し出を歓迎しているという。ただ、出版社を無視する

◎「不安の力」 発売10日で15万部

「不安の力」五木寛之著、集英社発売。不安は力なり。いまの時代、不安を抱かない人はいない。不安を感じる。9アメリカ病 新潮社 10人生で一番知りたかったこと 4漢字クイズ100 光文社